第２部
パネルディスカッション
日本仏教の未来



ファシリテーター：
若原雄昭（龍谷大学文学部教授、BARCユニット1リーダー）
コメンテーター　：
入澤　崇（龍谷大学文学部教授、BARCユニット2リーダー）
パネリスト：
サンガラトナ（パンニャ･メッタ・サンガ理事長、インド禅定林住職）
坂本廣博（叡山学院教授）
廣澤隆之（大正大学副学長、仏教学部教授）
並川孝儀（佛教大学仏教学部教授）
熊本英人（駒澤大学仏教学部教授）
福島栄寿（大谷大学文学部歴史学科准教授）
原　愼定（立正大学仏教学部教授）
内藤知康（龍谷大学教授、本願寺派勧学）

司会：　ここからパネルディスカッション、「日本仏教の未来」と題しまして、ご登壇の先生方と、若原先生をファシリテーターにしまして、また入澤先生にコメントをいただくかたちで進めたいと思います。それではここからはもう、若原先生にマイクをお渡したいと思います。

若原：　それではただいまからパネルディスカッション、1時間半の時間をとってございますが、進めさせていただきます。アジア仏教文化研究センターの若原でございます。私どものアジア仏教文化研究センターの趣旨、また活動につきましては、冒頭にセンター長の桂紹隆先生からご挨拶があった通りでございますけれども、アジア諸地域における仏教の多様性とその現代的可能性の総合的研究という大きなテーマを掲げております。

さまざまな企画をこれまで積み重ねてまいりました。我々自身も必ずしもはっきりとした進路が最初からあったわけではございません。ある意味では試行錯誤を重ねながら5年間のプロジェクトを進めてまいりまして、今年は4年目でございまして、いよいよ来年、2014年度が完成年度でございます。

アジア仏教をテーマとはしておりますけれども、私どもの構想は、最初からやはり着地点は日本の仏教を問い直すことである。そういう構想を持っておりました。我々研究メンバーすべて仏教研究者であると同時に仏教者である。先ほどの内藤先生のお話で、色のない馬はないとおっしゃいましたので、どんな色かは分かりませんが、それぞれ色がついているつもりですけれども、仏教者であり、日本仏教の仏教者であるという立場から、アジア仏教という大きな視野から私どもの関わっている仏教を見直していくということは我々の視野に入っていたことでございます。

最終年度の来年度は、まさに「アジアの中の日本仏教」というタイトルの国際シンポジウムをこのプロジェクト全体の総括として企画しております。今回の国内シンポジウム、「日本仏教に未来はあるか」、これはいわばその前哨戦と申し上げてもよいかと存じます。やや刺激的なタイトルは、センター長の桂先生ご自身のご希望でございます。

ただいまから、シンポジウムの後のパネルディスカッションということで進めさせていただきます。私どものアジア仏教文化研究センターはさまざまな仏教の代表者の方々が、思うところを自由に表明できるプラットフォームのようなものでありたいということを念願しております。今日、ご参加いただきましたパネリストの先生方も私どもの意のあるところをくみ取っていただきまして、十分に言いたいことを言っていただいたであろうと思いますが、まだブレーキペダルに足が乗っているような状態ではないかと思います。これからのパネルディスカッションでは、もうすっかりブレーキペダルから足を外していただいて本音で語っていただければと存じます。

本日のご発表、ご報告はそれぞれ非常に多岐にわたるテーマでございまして、また内容面でも重い内容でございました。私どものほうで、あらかじめ論点を整理させていただき

ました。その論点に従って、まず私ども仏教文化研究センターのメンバーでございます入澤崇先生からコメントをいたしまして、そのあとパネリストの先生方にご発言をいただきます。

フロアの皆様からのご質問を非常にたくさんいただいております。一つひとつお答えしている時間的な余裕はないかと思います。フロアからいただいたさまざまなご意見、ご質問もくみ取るかたちで論点を提示させていただきますのでご理解をいただきたいと思います。

論点を四つにまとめさせていただきました。まず第1点は、近代化と近代化における宗教の意義といった点でございます。基調講演のサンガラトナ先生のご報告にもございました。近代化の中で宗教というものが見失われている。しかし、アンベードカルという人の一つの特色は、インドの人々にとって宗教がいかに大きな存在であるかということを決して忘れなかったということだったと思います。そしてアンベードカルは近代化すなわち世俗化という西欧的な近代化を問い直した人物であろうと思います。いわば、西欧モデルとは違う、新たな近代化の道を模索した、それがアンベードカルであったという理解ができるかと思います。

また、廣澤先生のほうからは、近代化の過程でさまざまなものが実は排除されてきたのではないかという、非常に重要な問題提起をいただいたかと思います。そういったことを含めましてその近代化と宗教の意義といったような論点を第1に掲げさせていただきたいと存じます。

第2番目は、これもサンガラトナ先生の基調講演にも、また、先生方のご報告にも共通してお取り上げになった論点でございますけれども、僧と俗、あるいは出家と在家のあり方、あるいは僧と俗を超えた、サンガラトナ先生が日本で学ばれた僧俗一致した、僧俗一体の大乗仏教ということをおっしゃいましたけれども、そうしたあり方をどのように私どもは見直していったらいいか。また、他の先生方のご報告にありました通り、社会的な存在として、宗教者として、僧侶とはいかなる存在であるべきなのか。それが第2の論点になるかと思います。

その中には、僧俗の接点ともいうべき、さまざまな先祖祭祀や現世利益に代表されますような民俗社会との関わりといったことも含まれるかと存じます。以上が第2の論点として私どもが提示させていただきたいものであります。

第3の論点といたしまして、これも先生方のご報告にございました、宗門や宗派のあり方をいかにして超えていくことができるであろうか。また、大乗小乗といった対立をもはや超えていくべき時であるということを明確にサンガラトナ先生はおっしゃいましたけれども、そうした宗門や宗派をどのように超えていくのか。対立を超克していくのか。大乗小乗の流れ、南方仏教、北方仏教というような歴史的な経緯を、私たちはどのように受け止めてそれを継承し、また、必要であれば超克していくべきであろうか。そういった問題を

提起させていただきたいと思います。

もちろんそれは、宗門宗派それぞれにおける内的な変革という問題にもつながるかと存じます。宗教間対話ということはしばしば言われてまいりましたけれども、現在はさらに宗教内部の対話ということも言われております。インターフェイス（interfaith）ということが言われております。フェイスというのは信仰、ですから信仰間対話とでもいうのでしょうか。キリスト教の内部でも対話が必要である、イスラム内部でも対話が必要である、仏教内部でももちろん対話が必要である。そういった広い意味での宗教間対話、信仰間対話といったようなテーマにつながってまいります。

そして、最後の第4の論点は、これもどの先生にも共通しておりました。そして私どもの今回のシンポジウム「日本仏教に未来はあるか」というテーマにも直接関わってまいります。次世代の仏教者をどのように教育養成していくべきであろうか。これは先生方すべて、宗門学校、宗門大学のご所属でいらっしゃいますので、日常からそれぞれにお考えがあり、また課題として取り組んでおいでのことと存じます。サンガラトナ先生もインドで子どもたちの教育に当たっておられることと存じます。この次世代の仏教者の教育養成ということを第4の論点として提示させていただきたいと思います。

以上、4点の論点を私どものほうであらかじめ設定させていただきました。まず、アジア仏教文化研究センターのメンバーでございます本学文学部教授、入澤崇よりコメントを申し上げます。

入澤：　8人の先生方、貴重なお話をどうもありがとうございました。7つの仏教系大学の研究者の方々、そして坂本先生のところで天台学を学ばれたインドのサンガラトナ師、このように多彩な中身の濃い内容を聞く機会はこれまでに例がなかったかと思います。そしてこの8つの報告に対して10分以内でコメントせよということも、これまでにない試みではないかと思います。

この龍谷大学アジア仏教文化研究センターの目指すところ、これは午前中の桂先生のご挨拶にもございましたが、このセンターは現代社会における仏教の可能性と多様性を探るということを最重点課題としております。本プロジェクトが学内審査を受けた際、桂先生がスピーチの冒頭で9.11の事件に言及されました。

現代社会は暴力に脅かされております。2001年の9.11、我々は大変大きな衝撃を受けました。この大事件が起きる半年前にはアフガニスタン・バーミヤーンで大仏の破壊がありました。この大仏の破壊が9.11の予告編であったということは後に分かったことです（詳しくは、高木徹『大仏破壊－ビンラディン、9・11へのプレリュード－』文春文庫、参照）。イスラーム圏で大事に保護されていた貴重な大仏が木っ端微塵にされてしまうシーンを、私たち仏教者はまさに呆然自失として傍観するしかありませんでした。暴力・紛争という問題に対して、私たちはまだ何も有効な手立てを講じてはいません。

サンガラトナさんの報告のなかでふれられていましたように、釈尊正覚の地であるブッダガヤで数日前に爆破事件が起こりました。この事件を厳しく批判する声明をいち早く出されたのがサンガラトナさんです。近代文明に基づく現代社会において、なおも暴力・紛争は続いています。これに対して仏教がどのように対応するか。これは大きな課題です。いま、「敵を作り出さない文明」が求められています。

近代文明、それは進歩を前提として突き進み、私たちに多大な恩恵をもたらして現代社会を成立させたのです。その限りなき進歩が反面、問題を生じさせています。進歩してもしなくても、「今が充実する文明」の創出は、少欲知足を説く仏教が受け持たねばならないと思います。経済成長を目指す観念が異常に肥大し、経済活動というものがわが国では文化・宗教と切り離されてきています。そこに現代社会の歪みがあるのではないかと私は考えております。

近代文明の中の、どこがどのように問題であったか、それを明らかにしていく、そういう役割が仏教の果たしうるものではないかとも考えます。そこで、近代文明に直面した明治の仏教者の活動というものがひとつの示唆を与えてくれます。今日、廣澤先生のご発表のレジュメの中に、近代仏教の足取りが年表で示されておりました。近代仏教の見直し、これも大きな課題です。

重要文化財となっている龍谷大学大宮学舎の本館は近代建築の代表のひとつですが、これはイギリスのオックスフォード大学あるいはケンブリッジ大学の神学校を模したものではないかと言われております。浄土真宗本願寺派第21世宗主大谷光尊師、大谷光瑞師の父親ですが、彼はいち早く近代文明の教育制度というものに着目いたしました。近代文明のいいところはどんどん取り込む。しかしながら、その中核に仏教を据えるという基本姿勢。大宮学舎本館の建物ひとつがそういうことを物語っております。

現代社会の根っこにある近代文明とどう向き合うか、具体的な提言をもしお持ちの先生があれば、ぜひともお教えいただきたいと思います。寄せられた質問票の中にも幾つか、平和の問題をどう考えますかということが書かれております。これが第1点目です。

それから2点目でありますが、仏教者の育成という問題です。福島先生のご発表の中にありました「心ある仏教者」というものを私たちは目指すべきでありましょうし、また原先生がふれられた「菩薩行の実践」も社会貢献という観点から捉え直す必要があるでありましょう。浄土真宗の精神を建学の精神とする龍谷大学で日蓮の精神にふれることができ、私は非常に興味深く拝聴させていただきました。社会全体の救済を日蓮は意図していたということを詳しくうかがうことができました。

また、並川先生は「時代の流れを読み取ることのできる僧侶」という表現をされました。裏を返せば、僧侶がいま、いかに時代の流れを読み取っていないかということでしょう。仏教者が社会の中から遊離してしまっている状況、そこを仏教者はしっかり見つめねばなりません。

そして、廣澤先生は「意識の闇を深く見つめる仏教」を提言されました。これこそが私たちが模索していかなければならないし、この龍谷大学アジア仏教文化研究センターが目指そうとしているところではないかと思います。

大谷大学の福島先生からは、「時代に応答しない浄土真宗」といういささか耳に痛い言葉を先学の言葉の中から紹介されました。浄土真宗の僧侶は厳粛に受けとめなければなりません。時代をみつめ、己をみつめる仏教者の育成が急がれます。僧俗一体となった仏教者の育成ということ、これは4番目に問題とする教育と大きく関わります。

それから3点目に宗派の問題。日本の仏教の大きな特徴は宗派性です。一般の方々からすれば、その宗派性こそが仏教を分かりにくくさせているかもしれません。けれども、一面、これこそ仏教の多様性を示すもの。多様なるあり方が共存しているというのは大きな利点でもあります。

文明、文化、あるいは宗教が衰退していくときというのは、世界史的観点からみれば、均質化が衰退を引き寄せていく面がみられます。継続していくというのは、実は多様性が肝要なのです。もし日本に禅宗がただひとつ、あるいは浄土真宗がただひとつであれば、ここまで日本に仏教が存続し得たかどうか。この宗派というものを多様なるあり方という観点から捉え直すべきと考えます。

宗派がそれぞれに反省を行うという点も大事です。よく社会から宗派の閉鎖性ということが指摘されます。それに対して最も過敏な反応をしたのが曹洞宗であったと思われます。本日は熊本先生が駒澤大学からお越しいただき、これまでの曹洞宗の取り組みをご報告していただきました。宗派自身が反省ということをしない限りは、その宗派の閉鎖性や独善性は改善されることはないのですが、そうした取り組みをいち早くやってこられた駒澤大学に対して敬意を表したいと思います。

日本仏教のもつ多様性。ただ個別には欠陥もあります。たとえば、浄土真宗系の大学であれば、浄土真宗のことはしっかり学べる。けれども、他の宗派のことについては非常に学びにくい状況があります。これはどの宗門系の大学もかかえている欠陥です。

さきほど若原先生がプラットフォームと言うことを言われました。それぞれの仏教系の大学がプラットフォームを作る。そして現代社会の問題をそれぞれのプラットフォームで議論する。そういう場ができれば、今日のように龍谷大学に日蓮宗の先生、真言宗の先生、あるいは曹洞宗の先生をお迎えするというようなことが可能になってきます。そしてもっと気楽に、もっと柔らかい空間を作って、自由に語り合えることができればいいアイデアも出やすいと思います。

本日のシンポジウムが始まる前にある方から、日本社会は自殺者3万人を出している、それを仏教はどのように考えますかと質問されました。作家の五木寛之氏は現代の状況、自殺者3万人も出している状況を「こころの戦争」と表現されました。大きな問題です。各宗派とも自死の問題については深く考究をしているところではありますが、それがなかなか

社会に見えていないという現状があります。

並川先生はご発表の中で「人々の避難所」という言葉を使われました。自ら命を絶とうとする人が、そういう避難所へ行き、そして新たな道を進むことができれば、すいぶんと様相は変わってくるでありましょう。いま残念ながら、宗教界はそれを果たしているとは申せません。並川先生が提示された「避難所」というものを改めて問題にしてみたいと思っております。

さきほど申し上げた「プラットフォーム」をここで改めて各先生方にお考えいただきたいのです。各仏教系大学でプラットフォームを設置すれば、自由に討論する場ができ、問題がどこにあるか、課題とどのように取り組んでいけばいいかというようなことが見えてくるのではないかと、それが延いては日本仏教の活性化に繋がると考えます。

4点目は教育の問題です。言うまでもなく、大学は教育の場です。本日お越しいただいている先生方は仏教系の大学の先生方です。われわれはそれぞれが大学で人材を育成するという責務を担っております。本学の内藤先生はご発表の中で、真宗寺院の原型は「道場」であって、そこは念仏者を育成するところであったと強調されました。仏教の使命としては、やはり人材の育成、次世代の仏教者の育成ということがあげられると思います。

人材育成という点からすると、本日講演していただいたサンガラトナさんがよき手本です。話の中にありましたように、サンガラトナさんは9歳で日本に来られました。おそらく初めの頃は勉強も嫌になったこともあったでありましょう。けれども、坂本先生のおられる叡山学院で天台学を修められ、そしてインドへ帰られて仏教者として活動をされている。叡山学院の教育が異国の仏教者を育てたのです。日本語も非常に流暢です。日本人に気づかない視点、あるいは日本人以上に繊細な感性を備えたインドの仏教者が日本での仏教教育で育ったということに私は改めて感銘を覚えます。

実は今日、私はサンガラトナさんとは28年ぶりの対面でした。インドの中央部にナグプールという所があります。その近郊のパウニで仏教遺跡の発見があり、そこへ行きたいと思ったのです。それが28年前。そのとき、今度インドへ帰る予定のインド人がいるということを叡山学院のある方から紹介していただき、サンガラトナさんと初めてお会いしました。1時間くらいでしたか、お話をして、ナグプールで再会できたらいいねと言って別れました。残念ながらインドでお会いすることはできませんでした。今日は28年ぶりに再会することができました。全然印象が違っていて、非常に驚いています。

さて、今の日本の教育状勢です。現状では、公教育の場から仏教は排除されております。私は今、西本願寺の前にできました龍谷ミュージアムの館長を務めさせていただいておりますが、子供たちにも来てもらおうと思って、各高校・中学・小学校にも広く呼びかけております。けれども、公立学校はひとつの偏った宗教教育の場に子供を参加させるわけにはいかないのだということを、私は直接、ある教育関係者から言われました。

私どもの龍谷ミュージアムというのは仏教を通覧できる教育施設、そして仏教文化の多

様性というものにふれてもらう施設です。子供の時に宗教的情操を培うということは極めて大切です。彫刻や絵画にふれて、宗教的情操を養ってもらうべく、十分に子供たちにも喜んでもらえるようにという配慮を今しつらえつつあるところです。

けれども今、教育の現場で仏教のこころを伝えるということは非常に困難です。子供たちに仏教が伝わりにくい現実、これを何とか打破しない限り、仏教のこころを知らない子供は知らないまま大人になっていきます。また、仏教系の大学であっても、自分の宗派のことしか知らない、仏教全体のことはほとんど知らない学生が世に出て行きます。そして世間の流れは仏教が目指すところと大きく異なる。仏教の影がどんどん薄まっていきます。

仏教系大学が一致結束して、文科省にも強く働きかけ、これからの教育のあり方を世の中に発信していく。プラットフォーム機能を充実させれば、それも可能ではないかと私は思います。

以上、4つの論点をあげさせていただきました。各先生方から創造的なご意見をたまわりたく存じます。私からのコメントは以上です。

若原：　入澤先生、ありがとうございました。もうご自由に発言していただくということでよろしいでしょうか。あるいはこちら側から、サンガラトナ先生からご意見を伺うというかたちにいたしましょうか。

それでは最初に基調講演をいただきました、マナケ・サンガラトナ先生、今の四つのことにつきまして、どういう順番でも結構でございます。また四つの論点すべてお答えいただく必要もございませんし、四つの論点を一応、分けましたけれども、互いに関連した論点でございますし、そのあたりは先生にお任せいたしますけれども、どうぞご意見を頂戴できたらと思います。

サンガラトナ：　では四つの論点について私なりの、決してどこそこに偏っているというのではなくて、私なりの意見を述べさせていただきたいと思います。まず、近代化における宗教の意義ということですが、釈尊が生存しておられたときには、戒と律はその時にはありました。でも、論ということになれば、これはそれぞれの、その当時の近代化です。それぞれの地域、あるいはそれぞれの時代によって論が変わっていき、その論によって部派仏教が発生した。

ですから、近代化の問題というのは決して仏教の中においては、いま始まったことではなくて、ブッダが涅槃に入られてまもなくの頃からの仏教が抱えている問題ではないかと思います。この近代化をどういうふうにすれば仏教の根底も揺るがない、そして近代の人たちが、現在生きている人たちが仏教を容易に受け入れられるかということを考えなければいけないのではないかと思います。

部派仏教ができた要因も、仏教を近代化しようとしたことにあると。ところが仏教の基

礎を、本来の本義をおざなりにし、それぞれのボス、あるいは長であった方々が自分なりの自由奔放な解釈をしたがために、その当時の近代化が、本当の仏教が基礎になった近代化というよりは、それぞれの思想によっての近代化が発生したのではないかと思われます。

まさしく今も近代化をするにあたって、現代の人が喜ぶような方法しかとられていないのではないか。仏教が基礎になって現代に合う仏教が形成されているのではなくて、仏教という名前、もしくは仏教の上っ面だけが利用されて現代に合うような変化をしてしまっているのではないかと思います。

最近多くのお寺、もしくは若いお坊さんたちが、お葬式仏教ではなくて開かれたお寺、開かれた僧侶ということでやっておられますが、音楽ですとか絵画ですとか茶道ですとか、大変喜ばしいことではないかと思いますが、その根底をもう一度仏教に戻す。仏教の教義に戻す必要があるのではないか。

今、少し変わったことをするとマスコミが取り上げてくれ、マスコミにとって都合のいいように仏教が近代化されてしまっているのではないか。マスコミ、あるいは近代の人たちによっての都合のよさではなくて、近代化するにあたって、基礎が仏教であるというハードとソフトの問題があると思いますが、ソフトは現代に左右されてもいいのではないかと、現代に合ったようなソフトができてもいいのではないかと思いますが、ハードのほうを変えてしまっては仏教の存在意義そのものがなくなってしまうのではないかと思います。

ですから、近代化するにあたっては、ある程度のハードの部分はそのままに、そしてソフトの部分を現代に合ったような状態にしないことには、部派仏教の当時から仏教が抱えている問題がまた再度発生するのではないかと思います。

2番目の僧侶と出家、在家のあり方ということですが、もともと上座部仏教から大乗仏教が発生したことを考えますと、部派仏教が仏教本来の思想と離れていったのを、大乗仏教がもう一度ブッダが説いたその論点で論じよう、その信仰を、その修行をということで、大乗仏教が発生したように思います。そういった中で僧と俗の垣根を壊そうと。何のために垣根を壊すかということですが、在家の方々が僧侶の日常、あるいは僧侶の思想、僧侶のあり方に近づくために、在家が来やすいようにするための方法だったと思います。

在家の方がお坊さんに近づくには敷居が高いという、その敷居を取って在家の方々が僧侶の日常に近づくための方策が大乗仏教の僧俗一体ということだったのではないかと思います。しかしこれも最近、特に日本の仏教ですが、在家の方々のために高い敷居を取り払うのではなくて、僧侶が在家の方々に近づくための方策になってしまっているのではないかと。かなり厳しい言い方かも分かりませんが、本来の在家と出家の違いを一つにしようと。一切衆生悉有仏性ではありますが、やはり専門にやっている僧侶と在家の方々との差別ではなくて区別は十分にあり得ると思います。

その区別である敷居を取り払うための方策だったのでしょうが、今はお坊さんが下に落ちるための方策になってしまって、本末が逆転してしまっているのではないかと。本来は、

僧侶は僧侶としての生活を送り、その本来の僧侶の生活に近づくための高い敷居をとって、在家の方々がそちらのほうに近づくということが望ましいのではないかと私は思います。

3番目の宗派、宗門、大乗、上座部というあり方をいかにするかということですが、これはもう、簡単なことだと思います。ブッダに返れと。お釈迦様のその時代に、その思想に、その行動に返れば、私たちは、まったくもってどこにも異論がないというように感じます。ですから、歴史の2500年の中のどこか途中をとって、やはりいろいろな語弊が出てきます。私たちのそのスローガンが「ブッダに返れ」ということになれば、大乗、小乗、宗派、宗門ということがなくなってしまうのではないかと。もっと言えばなくなるということはもう、今となっては難しいと思います。

大乗仏教と小乗仏教が同一化するというのは、これは宗教というのは思想だけで成り立っているものではなくて、それぞれの社会、気候、文化で成り立っております。少なくとも日本にも1500年の文化伝統の上で成り立っている仏教ですから、いまさら他の諸外国の仏教と100パーセント交えることは不可能なことだと思います。

今の日本仏教のあり方にとって妻帯が必要だと私も思います。今の日本のお寺を維持するのに妻帯が必要だと思います。だからといってそれを諸外国の人が「ああそうですか」と言って受け入れるかといったら、これまた別問題かなと。逆に、日本人というのは割と自分のところにないものを美化してしまう。お坊さんにしても上座部の人たちが「戒律、戒律」と言いますので、本当に戒律を1500年も守っているお坊さんたちはすごい、日本のお坊さんたちはどうしようもないということを言われるのですが、これは決して私たちは上座部仏教の奥深いところまで見ているわけではありません。上っ面の、戒律を守っているという教義を見ているだけです。

ですから、簡単に日本の仏教がだめだと、外国の仏教が素晴らしいという日本人の独特な考え方ですか、パワースポットと言えば認めてくれるけれども、神秘的な場所だと言ったら日本語になってしまって誰も認めない。言っていることは同じなのですけれども、言葉とか現状が外国化してしまうと。たぶん私もこの顔でしゃべっているので皆さん、受け入れてくださっているのではないかと。私以上のことを言っても、私の顔でなければ受け入れられないと。

そういう比較問題の中での大乗、小乗ではなくて、日本には日本の仏教が厳然とあり、インドならインド、タイならタイという仏教はそれで認めて、お互いの同心円をこれから作り上げていく。批判して成立するのではなくて、お互いの同心円を作るがための努力が今後、私たちには必要ではないかと思います。

それから、次世代の仏教者の養育。これが本当に一番大事なことであって、一番難しいことかと思います。私自身も二十数年間インドで活動しております。弟子が10人ぐらいはいたのですが、なかなか居つかなくて出たり入ったり。かえって在家の方々が400～500人在家弟子としていますが、そちらのほうはのらりくらりですのでついてくる。ところが弟

子になってしまうと一途にこちらも求めますし、その通りに歩いてほしいという極端な願望を持ちますので、たぶん、それが圧力になったり、なかなか受け入れられないものになったりしているのではないかと思うのです。

私にしましても、また皆さん方にしましても、次世代の仏教の、仏教者の養育ということが本当に大事なことではないかと思います。その場合も最初から言ったことではありますが、日本仏教だインド仏教だという次世代を育てるのではなくて、日本仏教、インド仏教がありながらも、世界の仏教があるという前提で、私自身もそういった弟子の養成をしたいと思います。また私1人でやったところでそれは何の役にも立ちませんので、できることであれば皆さん方のところで育つ後継者にも、そういった一面を持っていただければありがたいかなと思います。

インドということで、歴史がインド仏教ですので仏教家ということですが、決してそうではなくて、法律上は政教分離にはなっておりますが、人口の8割以上の方がヒンドゥー教ということで、ヒンドゥー教擁護の政策がほとんどです。その中で私たちが学校を運営したり、いろいろなことをしたりしながら、そこで僧侶だけではなくて一般の方々にも仏教を分かってもらいたい。それが仏教者の養育になるかということでやっているのですが、そういった横からの風が強いものですから、なかなか私たちは次世代の仏教者の養育にまで満願できていない。

今後、この四つの中でも私にとりましても一番重要な課題がこの次世代の仏教者の養成でありまして、皆さん方の力を得ながら、私なりの、私の立場での、次世代の養育をしていきたいと思っております。以上です。

若原：　それでは坂本先生、どうぞ。

坂本：　2点だけに絞らせていただきます。一つは私が先ほど言いました件とまるきり重なるわけですけれども、何か事件が起こった時に仏教者が遠慮してものを言わない。言わないというのも、皆で牽制しあって言わないのか、それとも宗派ごとにニュアンスが違うから、なんとなくそれでうまくまとまらないのかもしれませんが、少々乱暴でもいいから極力発言する。どうもそれが必要ではないかなと思います。

発言したから、では効き目があるかというとそれは見えません。見えなくてもしようがないかと思います。実はコンピュータかなんかで、要するにいろいろな計算をする、シュミレーションをするときの話として、確かブラジルでチョウチョが舞うとフロリダで竜巻が起こるとかという、よく分からない話であって、ある論点がうまく行ったときには動く可能性がある。動かないときにはとんでもない影響が起こるか完全に無視してしまいになるか、どちらかにはなるとは思うのですけれども。

なんでしゃべらなければいけないかというときに、やはり私は先ほども言いましたよう

に、たぶんあれは題にだけ出しておいて、ほとんどそこの話をやらなかったからいけないのでしょうけれども、慈悲という根底さえ忘れなければ、少々間違ったことを言っても許されるのではないか。そこまで開き直らないと、どうも仏教者がいるということが、どなたかがおっしゃっていましたが、見えない。思っているだけでは見えない。仏教者はまさに見えないところに落ち込んでいるのではないかというふうに思います。

ただ、もう一つだけそこで必要なのは、きっとお坊さんであるがゆえに、ちゃんと努力しているというか。要するにあの人たちなら言ってもいいだろうと、聞くに値すると思わせるような、自分たちの意識改革というか、どこかで規律を考える。規律と言ってはいけないかもしれません。まじめに仏教者であろうと思っているという気持ちがあればいいのかなと思っています。

もう一つ、4番目の話だと思うのです。実はおっしゃる通り、宗教教育は公教育の中で一切だめです。ところがたまたま先ほど言いましたように、幼稚園を経営している。寺でやっていますから、例えば手を合わせるぐらいは文句は言われないそうです。やりすぎると延々と文句を言われるそうですから、加減がものすごく難しいのだそうです。

たまたま私は今年もヨーロッパに遊びに行くことになっているのですが、一緒に行く園長さんに言わせますと、実は小さい子どもたちまで扱うという保育園にさえすれば、実は県のほうはむしろ幼児保育を押し付けてくる。だからその人は今、神奈川県下に六つ幼稚園を持っているのです。ですから、大変だと思います。たぶん、その人はその人で私なんかが持っているものとは全然違う、とんでもない能力を持っているからそれができるのだとは思いますけれども、そういう積み重ねをやっていくよりしようがないと思います。

それぞれのご宗派で、特にご本山なんかだとか大きな寺院では幼稚園ぐらい持っていらっしゃいます。高校にしろ大学にしろ、持っているわけですけれども、やはり一番最初の段階で仏教にとっつかせないとなかなかうまくいかないのだろうなと。ぜひとも幼稚園をやる。これは言うほど簡単ではないことは承知ですけれども、その辺まで考えなければいけないのだろうと思います。理論的ではなしに今、思っていることを申し上げただけです。

若原：　廣澤先生、お願いいたします。

廣澤：　若原先生はアンベードカルについて、西洋的な近代化を問い直すインド的なものだと仰っていました。私がアンベードカルを読んだ限りでは、そこのところは微妙だなというふうに感じています。イギリスできわめて近代的な社会思想を受け継ぎ、インド文化に導入したからこそ、あのような社会運動が成り立ったという面もあるように思えます。今ここでは議論はできませんが、本当はサンガラトナ先生に聞きたいところです。

そしてアンベードカルと同様に、明治以降の日本の近代化というものに、大変深刻な問題が孕まれていると思います。そのことを考慮に入れつつ、異論を唱えるわけではないで

すけれども、一つだけ付け加えておきたいと思います。

要するに、社会貢献活動を利他行とみなし、そこに仏教の未来図を描く方もいます。社会福祉的活動も、近代以降の政治においては公共的であり、政治権力から切り離された仏教はそれを補完する機能をもちます。大正大学で昭和初期に先駆的に仏教の社会事業を展開した渡辺海旭も、国家社会主義的発想をもち、国家を補弼するものと考えていました。このような社会貢献活動には、インド大乗仏教の論書などで説かれる菩薩行と同一視できる原理があるのでしょうか。

私はインド大乗の菩薩行にそなわる非社会性、反社会的ではなくて非社会的である側面にも注目しておきたいと思っています。きっかけは麻原彰晃に対して中沢新一さんが、仏教は本来反社会的であると煽動した対談を読んだ時に疑問を感じたことにあります。中沢新一さんのように反社会性というとき、そこには政治権力への対決的な態度が温存されます。しかし、社会への顧慮をすべて抛擲し、ヨーガとか禅定の体験に入っていったときの、非社会的な内面の力が根本であろうと思います。その強い内面性の外的行為への発露として社会への関与があると思います。これは『瑜伽師地論』菩薩地などに説かれる五明に関しても学ぶことができると考えています。また鎌倉期の叡尊の実践にも学ぶことができます。

社会への配慮を捨てきり、人間の愚かしい行為の集積でもある社会の奥に潜むものを体験的に受けとめておかないと、社会への関与は仏教的ではなく、社会正義にもとづくものといえるでしょう。仏教界が社会的貢献を強調すると、それは現今の社会常識をもつ私たちによって心地よいですけれども、それだけでよいのかなといった、私の中にはいささかの危惧がございます。そのことについて、先ほど9.11の話がありましたが、私も9.11の問題で関連して文章を書いたことがあります。（『9・11テロとアメリカの大学』大正大学研究論叢第11号）。

9.11テロに関連して、先ほど入澤先生はバーミヤンの大仏の破壊について仰いました。私はその後のテロへの報復のようなアメリカによるアフガン空爆が、大変ショックでした。テロの後、空爆の前に何度かブッシュ大統領は演説しています。それらの演説の中で彼は「正義 justice」という言葉を何回も使っていた記憶があります。Justiceはキリスト教においては神の審判 judgmentに関係すると思います。神に代わって審判をするという発想は西洋起源の裁判やスポーツに見られます。審判はjusticeによる裁きです。

このような社会正義の原理をもつ近代市民社会の生き方を、仏教徒は原理的にどのように受けとめ、近代化と仏教思想を結びつけたらよいのでしょうか。仏教は社会正義を主張する社会的関与を実践原理にできるのでしょうか。明治期以来の仏教界は近代化の流れに乗ることに必死で、原理的な思想の検証にはいささか脆弱であった感じがします。時代の変化というバスに乗り遅れないで必死になっていたのが実状でしょう。バスに乗らないという発想はあり得なかったように思います。

別の観点から、仏教の社会への関与について申し上げます。その実践の原理は慈悲にあると考えます。慈悲は他者との精神的共感を基本にします。そこでは他者の人格に対して包括的 inclusive 関係をとります。しかし近代市民社会は自然法にもとづく社会契約を基盤にしますから他者の人格は排他的 exclusiveに関係します。所有などにおいて相互に排他的に契約によって人格は結びつきます。その契約において民主主義的手続きなどで神の国を理想とする社会正義的な社会変革が行われます。これは他者を包み込むinclusiveな人間関係を生み出す慈悲とは原理的に大いに異なります。

この話題は、実は仏教界でも問われ続ける差別問題における自然法的平等に関わるので、申し上げたいことは多くありますが、話題が脱線してしまうのでやめておきます。

ただもう少し申し上げますと、かつてP.ティリッヒの『キリスト教徒仏教徒対話』という本を読んで考えたことです。ティリッヒはもともとドイツ人ですが、アメリカに行ってシカゴ大学の教授になりました。日本に来た時、京都で僧侶の方々と対話したときの考えを後にこの本で提示しています。案内した人がどうも京都大学の先生らしいので禅宗ばかり紹介したのではないかという感じがしないでもない対話内容なのですが、とても考えさせられました。

その本の中で興味深いことが述べられています。キリスト教にとっては神の国の実現ということがあるが、それはこの社会に神の国と投影させるので、社会を変革する力を持つことができるが、仏教では涅槃だとか無というと、目的 telosがゼロになってしまい、神の国を投影させる社会正義が実現できないという考えを述べています。仏教は深い哲学をそなえているのに、実は最終的には社会変革の力の問題が残るというのです。そして彼は最後のページで、果たして日本に民主主義は育つであろうか、という言葉で仏教に問いかけています。非常に印象深い考えです。

民主主義とか基本的人権、人間平等というのは、自然法に支えられた近代市民社会を形成する基本原理となる概念です。このような概念を、先ほど述べた理由で、仏教は持ちえないと私は思っています。それをでも、仏教は本来人間平等を説いてきたといった考えがまかり通っています。伝統教学が無視し、近代仏教学において脚光を浴びた『スッタニパータ』の「生まれによってバラモンとなるのではない。云々」（650）に人間平等を読みとることは、古代インドの文脈を無視して、近代市民社会の常識を投影させて解釈したにすぎない、と私は確信しています。仏教は人間平等といったことを主張していなかったのに、バスに乗り遅れないために近代的バイアスでテキストを解釈していると思います。中村元先生の影響ははかりしれないと思います。そもそも日本の伝統教学は『スッタニパータ』など視野に入れたこともないのに、差別問題で批判されると『スッタニパータ』を引用し、仏教は本来人間平等を説いてきたと平然という態度に大いなる疑問を懐きます。

申し訳ございませんが、もう一つ例を出しておきます。鎌倉時代の叡尊の非人救済といわれる菩薩行についてです。叡尊の社会事業活動という見方に偏ると、私が強調する宗教

的要因が見失われるのではないかと危惧します。叡尊はその文殊菩薩への信仰にもとづき、最も汚れている人たちの中に文殊菩薩を見ようとし、その浄化に向けて精進しています。このような仏教の実践が近代という宗教の外に立った視点から社会事業活動に見えるわけです。しかし、その実践の深い心を見る努力を欠けば仏教活動の生命力は枯渇すると思います。

先ほど、並川先生がおっしゃった問題提起にも、それから福島先生もおっしゃったことにも関連しますが、やはり最終的には坊さんが自分をどう律して自分なりの構えを持つかということに帰結するのかなというのが私の考えであります。

最後に少しだけ、大事なことを申し上げておきます。教育問題は深刻です。いま役職上忙殺されているのが大学教育の問題でございます。あまりにも非力で恥ずかしくて喋ることを躊躇したくなります。先ほどの福島先生がおっしゃっていましたのは大谷大学だけの問題ではございませんで、大正大学にとってはさらに深刻な問題でございます。そして大正大学は四つの宗派でできている大学ですからもっと開かれているように思うかもしれませんが、決してそうとばかりは言えません。宗派間の見えない厚い壁もあります。大学運営は決して万全でないばかりか、中にいると欠点ばかりが目立ちます。

役職上、なかなか言うのは難しいのですが、あえて言わせていただきます。私はローマ字やカタカナ語のたくさん入った大学運営の議論に途惑っています。FDとかIRだとか、マネジメントとかガバナンスとか、どこの大学でもこんな言葉が飛び交っているはずです。日本語としては下品な文章が横行し、私たちも右往左往して、それをもって大学改革とやらをやっているわけです。いま私はそれを推進する立場なのですけれども、このような状況に仏教系大学が唯々として入ってしまっている現状を深刻に思想的に反省する必要があると、個人的には思っています。大学をとりまく状況に深刻な問題があると思います。

学生の質の問題は、先ほど福島先生がおっしゃった通りでございまして、解答を出すことは至難の技でしょう。総体として仏教界のあり方が問われなければならない問題であると思います。ちょっと話が違いますが、大学にいて次世代をどのように育てるのかは、私にとって最大の課題です。考えの過程を端折って言えば、もしかしたら、本気で仏教を求め続けると、近代の教育体系に位置づけられる宗門大学の存在理由は根本的に問われざるを得ないと思います。私には妄想のように思い浮かぶ仏教系大学のことがありますが、我慢して申し上げることを控えます。

若原：　ずいぶん際どいところまでディスクローズしていただきまして、ありがとうございました。それでは並川先生、よろしくお願いします。

並川：　それでは、二、三の点について少し申し上げたいと思います。

仏教は宗教として社会を作り上げるといった歴史をほとんど持たなかったであろうと思

います。むしろ、社会を的確に捉えて、人間の生きるべき道を教えたであろうし、生き方を示しただろうと思います。そういう面で現代の仏教を考えるとき、仏教者がなすべきことは、社会改革という大それた問題ではなくて、いかに現代社会をしっかりと見据えて、生き様を我々に示し得るのかというところにあって、そこに仏教界の一番大きな課題があるのではないかと考えています。宗派を超えての改革か、宗派内改革であるのか、その選択はどちらであるにせよ、そのことを真剣に問わなければ、仏教は今後必要がないという答えが出されても仕方がないだろうと思います。

それから、先ほども出家・在家という話がでましたが、私は今の日本仏教を考えるときには出家・在家という言葉遣いはやめるべきだと思います。こういう曖昧な言葉遣いが、結局、仏教界や僧侶の自己認識を誤ったものにしています。全部が在家だと言っていいでしょう。その中で、聖なる生き方をしている仏教者とそうでない人はいます。そういうふうに明確に自己認識のできる仏教者がいれば、それによって正しい次への行動が起こせるのだという自覚を持っていただきたいと、檀家の一人としてそう思います。

次に、いま廣澤先生がおっしゃったことと全く同じで、次世代の教育をどう考えるかは重要な課題です。言いたいことはいっぱいあるのですが、言い出したら切りがないので、一言だけ言いますと、18歳になって大学に来て、4年間でいいお坊さんに育ててくださいと言われても無理のように思われるということであります。やはり、自坊の親御さんがしっかりと僧侶に向けての下地を身につけた子どもに育てる責任を持たない限り、4年間で十分な教育はできないでしょう。そうした学生を指導されている先生方の大変さを側で見ているだけではありますが、私もそのように思います。ですから、親御さんがもう少し教育に熱心になっていただけないのならば、もう後継ぎはないと覚悟を持ってほしいと申し上げたいということです。以上でございます。

熊本： いまの並川先生のお話を受けて、ということになるかどうかわかりませんけれども、例えば曹洞宗では大正時代すでにお寺を二つに分けて、いわゆる結婚しているお坊さんのお寺と、それから独身でまさに聖職者としてやっているお寺とに分けてしまえみたいな議論があって、もちろんそれは実現しなかったのです。

先ほど曹洞宗は昭和11年からずっと悩み続けていると申し上げましたが、それはどの宗派も似たようなもので、そしてさらに言うならば、昭和11年からではなく、もう明治の中ごろぐらいからずっと同じことで悩み続けていて、それはおそらく今日と同じような課題で、同じような結論で繰り返されている。別にこのシンポジウムを否定するわけではありません。私だってそれを私なりに一生懸命考えているつもりなのですけれども。でも、この同じ議論の繰り返しが近代化なのか？ということになってしまうわけです。

結局、その百何十年、近代化についていこうとしているのか、あるいはついていけないのか、仏教界はずっと悩み続けている。だからそれは、また今からも悩み続けなければい

けないということになると思うのですけれども、ただそこに一つ、実は危険な問題があって、それは何かというと、にもかかわらずなぜ仏教は今も存在するのか。特に明治維新で、まず寺請制度がなくなって、土地も取り上げられてというような、危機的状況に仏教が陥って、なおかつ近代化についていけなくて悩んでいる。にもかかわらず仏教はいまだにちゃんとある。

一番大きいのは、やはり檀家制度があるわけです。寺請制度がなくなったのに、なぜ檀家制度があったのか。これが近代化の中の、近代化された家制度にうまいことくっついたわけです。このくっついたことによって何が起きたかというと、まさに天皇中心の大きな家を仏教が支えているという役割を果たしたのです。その果たした結果として何があったかというと、例えば第二次世界大戦があったわけです。

では仏教はまたこれから悩んで、同じ歴史を繰り返すのか？ということはやはり考えておかなければいけない。

関連して言えるのは、教育ということについて。次世代の仏教者の教育についても大変重要ですが、もう仏教者の教育については廣澤先生もおっしゃった通りですから申しませんけれども、その延長線上に当然、仏教による教育というものがあるはずです。

これもやはり注意しなければいけないのは、その危険性のほうです。2006年に　教育基本法」が改訂されたとき、その議論の中で、宗教についても重視される傾向が見えた、その時、仏教界の一部では、宗教的情操の涵養を強く求めた。あれも危険な考え方です。かつて宗教的情操教育を大事にしようと言ったのは、まさにこの昭和10年頃です。つまり宗教を教えることによって何をしたかったのかということこそが注意しなければならない大きな問題なわけです。

そういう危険性もあるというようなことがやはりありますので、ですから、近代化の中で、特に改善がなかなか困難なのだとすれば、少なくとも危険な部分に対しては急務として注意しておくというのが、私がいま近代の仏教を勉強していて思っていることです。以上です。

福島：　「近代化」ということが一つ大事なテーマとしてあるようですから、それについて思うところを、まず申し上げたいと思います。近代の真宗思想史を考える時、「自己」という言葉に象徴的なように、　近代」の真宗は、自己の苦悩という問題の出現とともに、そうした自己を見据えた教学が作り上げられてきたと思うのです。ですから、その明治30年代に、歴史的に出来上がったものであると思います。

翻って、現代社会において、「自己」というものが時代の中ではっきりしているかというと、どうでしょうか。実は　自己　が溶けてしまっているというか、そもそもの自分がはっきりしない。だから「自分探し」が流行したりするのでしょう。インターネットとかで匿名の誰でもない人物になりすましてなら、好きなことは言えるのだけれども、本当に

名乗って言えるかというとたぶん言えない。だから、そういう意味で、私は、自分が見失われ、自己が溶けている時代なのだと思うのです。

そういう意味で、すでに今は、「自己」を云々していて、学生たちとも話が通じる時代思潮にはないのではないかと感じるのです。やはり「近代化」の次の時代を迎えていると考えるべきなのか、それとも、「近代化」を成し遂げることができないまま、ずるずると、というべきなのでしょうか。ただ、「自己とは何ぞや」という問いかけ自体が意味を持つことが難しい、その問いでは、もう間に合わない時代となっているのではないかと感じるのです。実際、学生と対話していても、「君はどう考えるのだ」と言っても、うんともすんとも言わない学生が本当に増えているのです。本当に深刻だと思うのです。そういう、新しい時代に入ってきている中で仏教がどうあるべきか、ということがまさに課題となってくると思うのです。

そういう意味では、時代自体が、先行きが見えにくい時代であり、皆が試行錯誤して手探りして生きていくことが求められている状況にあるようにも思います。これまでの仏教の様々なあり方（僧侶、寺院、教学、説教、法話、仏教学等々）も、もしかしたら間に合っていないのかもしれない。だから学生たちは、これは4番目の仏教者の育成の問題につながるかもしれませんが、きっと間違うことを恐れて、正解を欲しているのでしょう。そういう意味で言うと、今は試行錯誤しなければならない時代なのかなと思ったりします。

正解は何か分からないけれども、それは試行錯誤しながら自分でつかんでいくしかない。そういう模索を許してあげるような環境がないと、学生たちは伸びないし、委縮していくと思います。たぶんずっと小さい頃から叱られながら正解を覚えなさい、正解を書きなさい、そういう教育を受けているわけですから。しかし、僭越ながら、仏教というものはそういうものを相対化する考え方に通じているのでは、と思うのです。一つの答えを覚えてそれを正解として生きていくのは仏教ではないだろう、そんな気がします。そして、学生と教員の関係だけではなく、教員同士でもまた、リベラルに対話ができる雰囲気が大学にはなくてはならないのではないかと思います。

若原：　ありがとうございました。それでは原先生、どうぞ。

原：　いずれも重い問題でありますけれども、近代仏教が教えを形骸化してしまったということは確かにあろうかと思います。それと同時に、日蓮のカリスマ性の傘の下に隠れて、日蓮宗の教学も形式的な建前論になってしまって、信仰の内実に迫るような教学的課題は主観的なものとして排除され、主体的な問いかけが希薄になり、なかなか民衆と向き合ってこなかった面があるかと存じます。

その結果として、ご承知の通りいわゆる在家主義の教団というのが発展し、國柱會をはじめとして創価学会、立正佼成会、霊友会、佛所護念会等々、日本の現代社会にもその信

者を自称する人たちがたくさんいるわけであります。けれどもそういう教団は、いずれも「南無妙法蓮華経」のお題目を信仰の中心に置いておりまして、それだけお題目には社会を巻き込む力があるのでしょう。それに対して、正統派を自認する日蓮宗は、いったい何をしてきたのかということも、当然ながら反省しなければならないと思っております。

先ほど廣澤先生が、近代仏教学において先祖供養だとか現世利益というものを取り残してきたとおっしゃいましたが、やはりそういう問題が日蓮宗の中にもありますし、在家教団が発展した理由の一つがそこにあるのだろうと私も考えております。

2番目の僧と俗という問題につきましては、俗の部分を取り込んでいく在家教団のほうが受け入れられやすいのは当然でしょうが、世俗的な御都合主義に傾くのではなく、本来の仏教的価値観に根ざした指導者として、僧侶の役割が改めて問われているのではないかと存じます。

日蓮宗の場合、僧侶になるための最短ルートは、１週間の講習と検定試験を受けた後、身延山で35日の修行をすれば、一応、僧侶の資格が取れます。仏教の専門知識をほとんど持たない僧侶が増えているのが実状です。世襲的に僧侶になる人の多くは発心が伴わず、どれだけ自覚を伴った僧侶を育成できるかという課題もあるかと思います。祖師の日蓮の考え方によれば、僧侶は「法師」としての使命感に立って、社会のリーダーとして、菩薩行の実践を心がけなければなりません。社会的な指導者としての資質を育むためにはどのような教育を施さなければならないのか、という課題があります。

仏教が社会とどのように関わるのか、という問題は宗派によって見解が異なるかと存じますが、日蓮が依拠とした法華経においては、真俗二諦を分けるのではなく、仏法と世法は相即するものであると捉えます。世俗におけるさまざまな経験には無駄なことは何一つなく、世俗のなかで葛藤や矛盾を経験することが、すべて仏道修行の糧になると考えるわけです。

ちなみに日蓮宗では、修行の場として荒行というものがございます。寒壱百日間の荒行は祈祷の伝授を受ける場ですので、一種の神秘的な体験をすることもあります。ところが私の経験から言えば、そこは世俗の社会の縮図のような世界でありまして、欲望が渦巻いていたり、いじめや差別、不条理なこと、慢心と怠惰など、社会問題が凝縮されています。実際にその中に身を置くことによって、改めて世俗社会の実相を知るとともに、仏祖三宝の慈悲の御心を実感することができたように思います。日蓮宗では「行学二道」という言葉がよく言われますが、法華経と日蓮の菩薩行の意義をしっかり学んだ上で、そうした経験を積むことによって、僧侶としての心構えが自ずと叩き込まれ、現実社会においてリーダーシップをとれるようになるのではないかと感じております。

第３に、宗派の対立とその超克という問題ですが、日蓮系の中にも在家教団ばかりでなく、様々な分派があります。法華宗でも本門流・陣門流・真門流、本門法華宗、顕本法華宗、本門仏立宗、日蓮正宗、日蓮本宗等々、分派は歴史的に見て、かなり重たいものがあ

ります。お互いに近しい関係だからこそ、近親憎悪のような面もありまして、その対立はかなり根深いものがあるのも事実です。そういう意味で、先ほど宗教間対話という課題が呈示されたかと存じますが、日蓮系では宗門間対話ということが、現実には難しい状況にあります。

そうした垣根を越えるためには、大学の役割が重要ではないかと、以前から考えておりましたので、去年までの学部長任期の間に、いくつかの企画を立てました。例えば、これまで一部のメンバーによって受け継がれてきました国際法華経学会というものがございます。それを持続可能なものとして組織化することも視野に入れて、昨年10月、立正大学開校140周年記念行事の一環として、欧米の法華経研究者を招集して学会を開催することができました。その中で、日蓮系他派の教学研究所にも案内し、創価学会の人も受け入れながら、立正大学が今後ともその中核として機能しなければいけないのではないかということを問題提起したような次第であります。

先ほど頂戴したご質問の中に、多様性という問題を、法華経の一仏乗の思想を活用してどのように統合していくかという課題、それこそが世界に宗教を発信できる大事な部分ではないかというご指摘をいただきました。法華経の一仏乗の教義は、多様性をお互いに認め合いながら、全体として調和を図る理念です。これを言葉で言うのは簡単ですが、具現化するための実践が難しいわけです。お互いが良い意味で緊張感を保ちながら、対話のプラットフォームをどのように作っていくのか。立正大学が法華経と日蓮の精神を担っていくとするならば、やはりその中心的な役割を果たしていかなければならないという思いを新たにしております。そういう意味で、本日こうした機会をいただいたことは、たいへん貴重であると感じております。

また先ほども申し上げましたが、日蓮の時代に大地震が起きたと。それを現代のことと短絡的に結び付けると誤解を招くかもしれませんが、例えばの話として、正嘉の大地震の3年後に日蓮は『立正安国論』を幕府に上奏しまして、その8年後に蒙古国書到来というかたちで歴史が動きました。日蓮の問題提起は大地震に触発されたわけでありまして、法華経の教説によれば、釈尊が法華経を説かれた時には地震が起きたとされておりまして、「此土の六瑞」の地動瑞というものですが、地震は法華経の真価が発揮される前兆であると、日蓮は主体的に受け止めます。ですから、マイナスの状況を如何にプラスに転じていくのか、今こそ仏教の真価が問われる時であり、仏教の自己変革のチャンスなのではないか。そのようなことを今回、改めて感想としてもった次第でございます。

４番目の次世代教育につきましては、先ほども少し申し上げましたが、立正大学もご多聞に漏れず、宗門子弟の入学者減少という一途をたどっております。その要因の一つとして、日蓮宗では1週間の講習・検定と35日の修行で一応、僧侶の資格が取れてしまう。それはもともと緊急避難的な措置だったのですけれども、今ではそれが本道になってしまって本末転倒の状態です。日蓮宗の教育制度には欠陥があると、行政のトップに問題提起する

ために、私がちょっと過激に言ったものですから、だいぶ睨まれました。宗門の将来を担う人材をどのように育成するのか、その中で立正大学が果たすべき役割は何なのか。大学に入る学生の資質もどんどん低下しているのが現状です。易きに流れる傾向に歯止めをかけながら、大学の教員側の意識改革も促さなければなりません。

教育というのは、法華経でいえば仏の子を育てるということであります。教義的には仏の生命を受け継ぐ存在として、すべてが菩薩であるという理念に立たなければなりません。そういう普遍的な課題として、どのように人材を育てていくかという問題意識を持ち続けることが必要であろうと思っております。以上です。ありがとうございました。

若原： 原先生、ありがとうございました。それでは最後に内藤先生、お願いいたします。

内藤： 先生方がそれぞれご自分の言いたいことを言っていただいて、時間が残っていないということが理想的だったのですけれども、15分も残っております。別に最後、ぎりぎりまでですることが私の義務ではないですよね。いろいろ問題を挙げていただきましたが、近代思想といいますか、近代化との関係ですけれども、こういう言い方は非常に乱暴かも分かりませんが、特に西洋から普及してきた近代化の一つは合理主義にあるかと思います。結構、現代人にとっては抜きがたいものになっているような気がするわけです。

それに対しましては、合理的でない世界があるのだということをきちんと合理的に言うということが大事だと思うのです。合理的でない世界があるということを合理的にきちんと説明するということが、私はこれはたいへん大事なことではないかと思います。単に合理的でない、合理ではすべては解決しないのだと、まさにその通りなのですけれども、それだけ言われましても、合理主義に毒されたものに対しては全く説得力がないとしか言いようがないと私は思います。合理主義ではすべてが解決できないのだということを合理的にきちんと説明する。それだけの努力をやはり仏教者には必要ではないかと思うわけであります。

もう一つは、合理主義から批判されたことは果たして正しいのか。先ほどから、葬式仏教という言葉が何度か出ておりましたが、その葬式仏教も結局、近代主義からするとまるで迷信みたいなかたちで位置づけられているような雰囲気で聞かせていただきました。私の尊敬する、ある先生があるとき、「葬式仏教、葬式仏教というけれども、人間の死という一番厳粛な場面に関わらせていただいて一番ありがたいと思っている」とおっしゃっておられました。確かに住職として思うことは、こういう通夜・葬式という場面において、一番仏法の話がしやすいです。なかなか日常性の中に埋もれてしまっているときに仏法の話をしてもなかなか受け入れてもらえないところがありますけれども、ある意味、非日常的な出来事、自分にとって一番大事な人を亡くしたというような、そういう時のほうがきちんと仏法の話をしても、丸々受け入れてもらえるかどうかは別にしまして、とりあえず

受け入れる構えというのはその時にできているように思います。

そういう意味から言うと、単なる葬儀の執行者というものではなくて、やはりそういう場面を与えられているわけですから、利用しないと損だと思います。変な言い方ですけれども、きちんと利用しないといけません。利用してこそ、逆に葬儀というものに宗教的な意義というものが認められていくのではないかと思ったりもいたします。

僧と俗の問題ですけれども、真宗におきましては基本的に『教行信証』の「信文類」では「凡そ大信海を按ずれば、貴賤・緇素を簡ばず」と、真理の世界ではそういう僧侶、そして出家、在家の区別は一切なくなってしまう。そのような区別はしないのだというのがあり、あるいは親鸞自身も「僧にあらず、俗にあらず」ということを言っているわけです。しかし一面、親鸞は自らを「無戒名字の比丘」と位置づけているということができるわけです。無戒名字の比丘ですから、まさに名ばかりの出家、比丘というのは出家でしょうから、名ばかりの出家ということだと思います。やっていることも、あるいはかたちもまったく出家ではないけれども、名ばかりの出家であるということです。

しかし、同時に『末法灯明記』を引用して、それとの関係の和讃もいくつかあるのですけれども、結局その仏が存在していたときには、仏教のことはお釈迦さんに任せておけば、我々は別にごちゃごちゃしなくても大丈夫だ。お釈迦さんがおられるのだから。もっと立派な方々がおられるときには、そういう方々に任せておいていいのだけれども、名ばかりの僧侶しかいなくなってしまうと、名ばかりの僧侶が仏教全体を背負わなくてはならないという、そういう側面をおそらく親鸞は示していると思います。名ばかりの僧侶ということに対する恥ずかしさということと同時に、名ばかりの僧侶が仏法を背負わなくてはいけないという責任感というものを親鸞は示しているように思います。

そういうことを考えたときに、当然、真宗の教義から言いますと阿弥陀仏の本願の前に立たされた時には、出家も在家も僧も俗も一切関係ないわけであります。しかし、この世において、やはり教えを広めるとかそういう問題に関して言うと、僧侶というのは逆にそれなりの責任を持たなくてはいけない、そういう立場にあります。　僧にあらず俗にあらず」の「僧にあらず」は、いわゆる国家の認める僧ではないという意味がほとんどであろうということであり、これに関しましては、だいたいそういう説が通説になっておりますから、自らが無戒名字の比丘であることを否定したわけではないかと思います。

それから宗派間の大乗小乗の対立の超克ということですけれども、一つ思いますのは、当たり前のことですけれども、対話が必要だということです。当たり前のことです。ただ、気を付けないといけないのは、対話をするときに共通の土俵というものを意識しないと、それぞれが自分の土俵だけで話をしていますと、これは対話できないです。すれ違っているだけになってしまいます。

例に出して申し訳ないのですけれども、今はおそらくそうではないと思いたいわけですが、かつて大谷大学の真宗学の先生と話をしておりましたときに、浄土真宗はこうなのだ

という話になった時に、浄土真宗とはこうなのだという、その根拠として、「清沢満之がこう言っている　という言い方をされたわけです。私たちからしますと、それがどうしたのですかとききたくなります。清沢満之がそう言っているということは真宗の教えがこうだということを決めていくのに何の根拠にもならないと、私たちはそう考えるわけであります。

大谷大学の中でそういう話をされるのは別に結構でありますけれども、少なくとも清沢満之先生は龍谷大学と大谷大学との共通の土俵ではないわけであります。「親鸞がこう言っている」と言うのでしたら、これは完全に、完璧に根拠になるわけであります。

そういう意味から、　仏教はこうなのです、親鸞がこう言っていますから」と言いましてもこれは、今日の会では何の根拠にもならないです。お釈迦さんがこう言っている、経典にはこう書いてある。しかし別の経典にはこう書いてあるぞとか、こういう議論になっていく可能性は非常に強いわけであります。

そういうことを考えましたときに、真宗教学の中にいろいろな流れがあるわけですけれども、一つはこういう問題がございます。これは3代目の覚如という人が、阿弥陀仏は本師・本仏であるということを言ったわけです。阿弥陀仏が本師であり、それ以外の仏はすべて弟子仏であると。阿弥陀仏が本仏であり、すべての仏は末仏であるということを言ったわけです。

この阿弥陀仏が本師・本仏であるということが一体どういう意味なのかというようなことが、江戸時代の学者の中でいろいろ議論されてきます、その中で一つ面白いものを出しておきます。農閑期になると、農家の主人が宿屋に手伝いに行く。その時には宿屋の主人が主人であって農家の主人は使用人なのだ。逆に農繁期になると、宿屋の主人が農家に手伝いに来る。その時には農家の主人が主人であって、宿屋の主人は使用人である。

それと同じように、本願による救いという法義においては阿弥陀仏が本仏であり、例えば大日如来は末仏になる。しかし、いわゆる真言密教というご法義の世界では、今度は大日如来が本仏であり、阿弥陀仏というのは末仏のような位置づけになってしまう。これは法義が違うから、場面が違うからそうなのだと、こういう説明の仕方をする学者もいるわけであります。

自分たちだけが正しいのだという考え方ですと、あるいは大乗仏教と上座部仏教との間とか、あるいは宗派間の間とか、初めから話ができないということになってしまいますから、やはりそれぞれがある意味相対的なものなのだという姿勢を一つ持つことが大事なのではないかと思います。

ただ、真宗教学の上から言いますと、阿弥陀仏が絶対的な本師・本仏だという捉え方をしたほうが非常にありがたいという側面はあるのです。そういう意味から言いますと、先ほど入澤先生が一色になるのはいけないと言われましたが、少なくとも本願寺派におきましてもさまざまな見解というものがいろいろ出されて、現代においても、さまざまな問題

について必ずしも一つに統一されているわけではないのです。

最後に申しますと、阿弥陀仏の本師・本仏について相対的な本師・本仏なのだという学説もあるし、絶対的な本師・本仏だという学説もある。両方が存在して、両方の存在を許容するようなところ、これも一つ大事なのではないかなと思ったりもするわけであります。これは私の個人的な好みということもあるのですけれども、「右向け右」と言ってみんな右を向くようなそういう社会は気持ち悪いです。不健全だという気がいたします。一色になるのは非常に不健全だという気がいたします。

そういう意味から申しますと、やはり次世代の仏教者の育成というようなことに関しましても、阿弥陀仏の「四十八願」の中に「触光柔軟の願」がありまして、阿弥陀仏の光に触れると身も心も柔軟になる、柔らかくなるといいます。柔らかくなるということは、基本的には他人の意見を受け入れるだけの考えの柔軟さを得るということになるのではないでしょうか。それは真宗の教義から言うならば、自らは凡夫であり、絶対に正しいはずはないということに基づいたものでもあります。

非常に有名な『歎異抄』の「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはこと、まことあることなきに」という言葉ですが、私はこの「煩悩具足の凡夫」は、なにより親鸞自身のことを言っているのだと思います。そらごとであって真実はないのだといわれ、「念仏のみぞまこと」といわれます。念仏に照らされるから自らの「そらごとたはごと」ということが分かってくるのではないでしょうか。　そらごとたはごと」が分かるからこそ、人の意見をきっちり聞けるという姿勢ができてくるのではないでしょうか。

次世代の仏教者の育成ということでありますけれども、基本的には私はそこのあたりに一つポイントを置いております。今年が最後ですから、後は後の先生方にお任せするしかないわけでありますけれども。ちょうど50分になりましたので、一応、私の意見をこれで終わらせていただきます。

若原：　内藤先生、ありがとうございました。ちょうど時間でまとめていただきました。そうしますと、やはりフロアからお寄せいただいております質問に個別にちょっとお答えいただく時間がもうございません。予定の時間をすでに超過いたしましたので、このパネルディスカッションはここでいったん終了とさせていただきたいと存じます、あらためまして先生方に大きな拍手をお願いいたします。

司会：　まだまだ時間がいくらあっても足りないという感じでございますが、時間になりましたので、それぞれ入澤先生からご提示された4点、それと各先生方のコメント、意見というかたちでいただきました。そうしましたらもう一度ご報告者、そして基調講演のサンガラトナ先生に大きな拍手をお願いいたします。